熱さ伝える　仲間の輪

読売新聞教育ネットワーク記者　鷲見 一郎

出場校のみなさんの活動内容を紹介する「読売SDGs新聞」の編集・制作を担当しています。この冊子とともに、今回大会を伝える新聞が届いているはずです。前回、前々回の大会はコロナ禍により、残念ながら、文章と動画での発表でしたが、3年ぶりに対面形式で行われた今回大会では、思いの丈をぶつけることができたようです。全国大会でも地方大会でも、みなさんの熱意が取材している側に伝わってきました。

環境大臣賞に輝いたのは宮城県農業高校でした。プラスチックを使った肥料から、プラスチックの殻が排出される問題に取り組みました。

この肥料を使わない栽培方法を開発することで、問題解決の答えを導き出しました。日本の主食と言われるイネの栽培に関わる重大懸案に正面から取り組み、これまで畑作で使われていた肥料に着目。代替肥料としての可能性を探りました。この肥料は効き目だけでなく、コスト面でもプラスチックを使った肥料よりも安く上がるなど、満点と言っていい解決策ではないでしょうか。

プラスチック肥料については、JA全農が2030年までに、プラスチックを使った肥料をゼロにする目標を掲げています。日本の根幹・稲作に関わる宮城県農業高の取り組みは、社会貢献の度合いがきわめて大きいと言えるでしょう。

環境再生保全機構理事長賞の群馬県立藤岡北高校は、学校が所在する藤岡市の天然記念物ヤリタナゴの保護活動を展開。保護活動の内容をそのまま、幼児や小中学生に対する環境教育に活用するなど、無駄なく環境保全活動を進めています。また、ヤリタナゴ懇談会をつくり、地域を巻きこむ形で活動を盛り上げました。

国連大学サステイナビリティ高等研究所長賞の熊本県立熊本農業高校は元々、養豚の飼料に食品廃棄物を使うなどの取り組みをしていました。出荷の際に大量廃棄される脂に着目。廃棄ゼロを目指し、試行錯誤の末、洗濯用せっけん作りにたどり着きました。その後、店舗に商品として置かれているそうです。

読売新聞社賞の高校生環境エシカル推進委員会は、学校の枠を超えて、仲間の輪を広げる独特の活動形式が目を引きました。気候変動に対して行動を起こそうと、環境漫才や環境ラップで楽しさを織り込んだ啓発活動を展開。全国に活動を展開する行動力が評価されました。

高校生が選ぶ特別賞の長野県佐久平総合技術高校は昨年に続き、酒かすの活用に取り組み、今回はラーメン作りに取り入れました。先生が選ぶ特別賞の北海道士幌高校は、突風の風害から農地を守るための防風林の維持・更新に正面から向かい合いました。さらに今大会から新設された協賛企業特別賞、SDGs活動特別賞を、晃華学園中学校高等学校、大阪府立堺工科高校がそれぞれ受賞しました。

SDGsの実践活動に取り組む児童・生徒の皆さんを応援するため、読売新聞では「SDGs@スクール　チャレンジ校」（チャレンジ校）という取り組みを展開しています。キーワードは「じぶんごとから　はじめよう」。世界規模、地球規模の問題を、「他人ごと」として考えるのではなく、「じぶんごと」としてとらえるお手伝いをすることで、SDGsのゴールを目指す皆さんの力になりたいと考えています。

毎月第一水曜日に読売新聞朝刊に掲載している「SDGs@スクール」のコーナーでは、「チャレンジ校」の皆さんの「じぶんごと」の取り組みを幅広く取り上げることで、ほかの児童・生徒の皆さんの参考にしてもらいたいと考えています。ぜひ、みなさんの「じぶんごと」を教えてください。「チャレンジ校」に参加すると、年2回発行するタブロイド新聞形式の教材「読売SDGs新聞」を、希望する児童・生徒の人数分お届けします。登録は無料で、随時受け付けています。

（https://form.qooker.jp/Q/auto/ja/schoolchallenge2022/sdgs/）